

文芸誌って何だ？

私は文芸誌を二つ発行している。その内の一つは詩誌で、その詩誌は今春に満五十年になった。いささか疲弊気味で終刊することにした。同人に劇団主宰のこしばきこうさんがある。論客で文章の切れがいい。その彼は『全国同人雑誌』で特別賞と優秀賞を連続受賞した。

驚きはなかった。特に『ざいん』二十号の「暗い森」の情景描写（特に雪原）に私は感嘆したのだ。北方住まいの私が惚れた表現力なのだ。コトバで絵画のような表しは常人には困難だろう。彼は難なく越えた。私は美術教師だったので、文章のデッサン力の卓抜さに脱帽したのだ。

その彼は終刊号に寄せた添文で「次は『個人詩誌』を死ぬまで出すとよいでしょうね。（応援しますよ）」とあった。そして添えられたエッセイに「詩と詩論とが分裂し詩論が詩を不安にさせてしまうのはなぜか。それは詩が人を選ぶのではなく、人が詩を選んでしまうからだ」と書かれていて、思案してしまった。これまで長く詩誌を出してきたが、「書けなくなった。辞めたい」と何人もがつぶやき、退会していった。これには引き留める術はなかった。こし

ばさんの推論には、時折ドキリとする。

文芸誌に入る。私は創作誌『ざいん』の発行人でもある。同人は北海道南部に位置する室蘭と苫小牧に居住している。どちらも大きな港を持ち、フェリーが発着する。室蘭は製鉄、苫小牧は製紙と工場町でもある。これまで文学の往来は乏しかった。そこで三年前、私が呼びかけて『ざいん』と苫小牧の『響』で相互交流をはじめた。人物往来から初めて、文学研修と懇親を重ねてきた。この辺りは胆振地方になり、この市町村には文学同好会はあるが結社ごとにとままり、横の連帯は細い。とりわけ必要度はないからだ。同好の士は閉鎖しがちになる。

私は同好の由緒を大切にしながら、質的には風穴をあける方策を念じてきた。室蘭で五十年間、文化運動をしてきた。いまは『文芸協会』『港の文学館』が両軸になっている。文芸協会三役はみな『ざいん』仲間だ。その協会の主要取り組みは「文章教室」になって継続されている。顕彰としては協会主催の「室蘭文芸賞」が三十数年続いてきた。顕彰の趣旨は、作品を認め合うことなのだ。その文芸賞だが応募資格に工夫を凝らしている。ここ胆振在住か、胆振の文芸同人とある。後者の場合、どこに住んでも文芸誌が胆振発行なら宜しいと。過去に、米国住まいで地元文芸誌投稿で受賞した人がいた。

『ざいん』についてまとめる。年一度の刊行だが、みな切

磋している。誌是は（主義主張にとらわれず、清新で独創的な作品を生み出す努力をしたい。それを目的とする）となっている。平易だが、「清新で独創的」はハードルが高い。崇高目標ではない。努力目標でもない。やはり、実作目標にしているからだ。

本年も同人の中井ひろしさんが全国同人雑誌優秀賞を獲得した。本誌では連続受賞になる。発行人としてはうれしく誇らしい。まだ次の候補人はいる。親和と琢磨、この相容れない玉虫色に同人誌はある。でもそれは矛盾しない。同人は〈同志人〉なのだ。競い励む。矛盾するが、この不思議な相互こそ、同人誌の地熱なのだと思う。『ざいん』には、それがある。こしばきこうさんは「『ざいん』に近未来を書いています」と便りにあった。冒険・未知・虚無・孤独と、どこまで届くか。遣り残したくないものだ。自己証明だから、唸って考えたい。

（光城健悦）

「ざいん」の友

〒050-0007 北海道室蘭市水元町22-7
発行人 光城健悦

TEL 090-2876-1409



「ざいん」同人 左から二人目が主宰者光城健悦